



Title	其角年譜詩稿(五)
Author(s)	今泉, 準一
Citation	明治大学教養論集, 213: 27-54
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/12212">http://hdl.handle.net/10291/12212</a>
Rights	
Issue Date	1988-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# 其角年譜試稿(五)

今泉準一

元禄五年(二六九二)壬申 三十二歳

春○正月刊 幸賢編『河内羽二重』発句一入集。資料篇六四。

○正月刊記 春色編『わたまし抄』発句一入集。資料篇六五。

○正月刊 鷺水編『春の物』発句一入集。資料篇六六。

○正月序 尚白編『忘梅』発句五入集。注六四。資料篇六七。

○正月序 遠舟編『すかた哉』発句一入集。資料篇六八。

○二月三日 珍碩、芭蕉に宛てての書簡の中で、其角の歳旦三物が京・大津の芭蕉門の人々「驚き入り候由」を報ずる

(「元禄五年二月十八日付、珍碩宛芭蕉書簡」『校本芭蕉全集』「書簡篇」)。注六五。

○二月十日 支考、奥羽旅行に出発。餞別句会、芭蕉・其角・杉風・枳風ら十一人。其角の餞別吟。

白河の関に見かへれいかのほり

『葛の松原』・『削かけの返事』注六六。

○二月十五日刊 季範編『きさらき』発句四入集。資料篇六九。

○二月十八日 珍碩宛芭蕉書簡に、点取俳諧の横行に批判的態度を示している芭蕉がこれに超然として其角を称揚の文がある。注六七。

○二月十九日 乙州の母知（智）月ならびに乙州、露沾公より招かれ、露沾邸にて俳筵、知月・露沾・西国・桃隣・尺草・未陌・沾荷・乙州・其角・沾蓬・沾徳参会。俳諧二十三句。注六八。資料篇七〇。  
△芭蕉に

富花月

草庵に桃桜あり門人にキ角嵐雪あり

両の手に桃とさくらや草の餅

の吟あり。これに対して

菓子盆に芥子人形や桃花 其角

桃の日や蟹は美人に笑るゝ 嵐雪

の句があり、『桃の実』に「かゝる翁の句にあへるは人々のほまれならずや」とある。注六九。

夏○四月十五日刊 句空編『北の山』発句五入集。資料篇七一。

○五月七日付去来宛芭蕉書簡、江戸の様子をかなり詳細に報ず。資料七二。

○五月十日

弥陀のりさうを蒙らすはとこそ

祈りしに是か結縁は

夏の中に杓子をかふる鼠かな

さ月十日の夜東潮の食次に杓

子のうせけるをとふらひける・

也

これに関連し、東潮・卒白・嵐雪・素イの句あり〔富士詣〕。

○五月十五日刊記 支考『葛の松原』発句五人集。他に其角に關係ある文五章。号、晋子。資料篇七三。

○六月始 支考奥羽旅行より江戸に戻る。同中旬、其角、支考持參の不玉の集に一句を贈り、またこれを立句に支考・

桃隣と三吟歌仙一卷〔継尾集〕『削かけの返事』『飯鮓の』の巻。

○嵐蘭の編に成る『けし合』に跋文を兼ねて、けしの句を贈る〔『けし合』〕

○夏序 車庸編『己か光』発句一二入集。資料篇七四。

秋○七月七日 素堂の母喜寿の祝に、芭蕉・嵐蘭・沾徳・曾良・杉風・其角出席。各発句あり〔『韻塞』・『蕉影余韻』〕。

○八月九日 許六初めて芭蕉に謁す。このとき、其角俳諧についての芭蕉の言あり〔『俳諧問答』〕。注七〇。

○八月三日より十五日 芭蕉の『三日月日記』あり。其角の発句二。

池水も七分にあり宵の月

川筋の関屋はいくつけふの月

芭蕉庵を訪ねての句であらう。

○八月十五日 許六、其角・嵐雪と会遊〔『旅館日記』〕。注七一。

○八月 芭蕉の俳文「芭蕉を移す詞」(ハ)〔『校本芭蕉全集』による〕に「其角・一品ら勧進の聖となりて」とあり、

芭蕉庵再興に其角も努力したことが知られる。

○八月上旬刊 東潮編『富士詣』発句一入集。資料篇七五。

○八月刊記 句空編『柞原集』発句二入集。資料篇七六。

○秋序 嵐蘭編『けし合』発句一入集。資料篇七七。注七二。

○九月下旬刊 沾徳編『誹林一字幽蘭集』発句一〇入集。資料篇七八。

○九月序 友琴編『鶴来酒』発句一入集。資料篇七九。

△九月十三日 許六、この夜其角に会せるか。注七一

冬○十一月八日付 詞山宛其角書簡。注七三。資料篇八〇。

○十一月十二日 岩翁亭百韻。立志・岩翁・嵐雪・其角・遠水・未陌・介我・専吟・桃隣・亀翁・横几・尺草・山夕・筆（『三家集』「夢開」「躑にて」の巻）。

○十二月三日 意専宛芭蕉書簡に発句一あり。注七四。

声かれて猿の歯白し峰の月 キ角

□十二月十五日 芭蕉は、許六宛書簡に「其角方、拙者句もとりに不レ参、いまだ遅なはり不レ申候間、御せき被レ成まじく候。」と認めた。当時、歳旦帖の準備を進めていたらしい。（石川真弘編『蕉門俳人年譜集』「宝井其角年譜」）

○十二月二十日 彫棠（後に周東と改号、青地氏）のもとへ、芭蕉・其角・桃隣招かれ、他に黄山・銀杏を加え、六吟歌仙一卷（『句兄弟』『栗津原』「打よりて」の巻）。

○兀峯・翁（芭蕉）・酒堂・里東と五吟歌仙一卷（『桃の実』「水鳥よ」の巻）。注七五。

○歳暮 表八句。其角・溪石・芭蕉・普船・盤子・史邦・去来・文章（『小春笠』「小傾城」の巻）。注七六。

○年末 許六、其角と会せるか。注七一。

○この年刊 不玉編『継尾集』、発句二・歌仙一入集。資料篇八一。

○同 我黒編『七瀬川』、発句一、入集。資料篇八二。

○同 助叟編『鉦始』、発句一、入集。資料篇八三。

○同 団水編『くやみ草』、発句一、入集。資料篇八四。

○同 雨行編『時代不同発句合』、発句一其角の名で入集するも、これは去来の誤り。注七七。

△此の頃の稿か 梨節編『反古さらへ』、発句一、入集。注七八。資料篇八五。

元禄六年（一六九三） 発西 三十三歳

春△歳旦吟

蓬萊の松にたてはや菅根の松（『薦獅子集』）。右を発句に三物一。他に其角・仙化・枳風・介我・彫棠の三物二あり（『旅館日記』）。

○一月五日付 岸本八郎兵衛（公羽）宛杉風書簡に「（略）其角桃青歳旦之事御申越被致候則持せ進し申候年々之事にて替りたる事も無御坐年去当年は其角五ツ物出来申候沙汰にて御座候桃青庵の引付も書進し申候私儀只今は一円手透無御座候故其角へも風雪へも断申句帳之内のかれ世間之沙汰をものかれ申候（略）」とある。（飯田編『蕉門俳人書簡集』）

○一月十九日付 岸本八郎兵衛（公羽）宛杉風書簡に「然は短冊五枚被遣候桃青にも書せ可申候（略）其角儀は心得申候（略）」とある（飯田編『蕉門俳人書簡集』）。

○正月下旬序 蘭化老人（常牧）編『この花』、発句一、入集。資料篇八六。

○二月下旬後序 休計編『浪花置火燵』、発句一、入集。資料篇八七。

○二月序 桃林軒序『彼古礼集』発句二・付句三、入集。資料篇八八。

○三月上旬序 三十六編『猿丸宮集』発句一、入集。資料篇八九。

○三月三日 許六、其角・嵐雪・桃隣と会す(『旅館日記』)。注七一。

○三月十八日 人磨講を桃隣亭にて修す。歌仙一卷。会者、枳風・仙化・全峰・氷花・其角・万卷(『陸奥衛』「凡又」の巻)。

×備前岡山の藩士、兀峰と三物一(『桃の実』「梅か枝や」の巻)。

△芭蕉と三物一(『金蘭集』「俳諧一葉集」「春うれし」の巻)。注七九。

○三月二十日ごろ 許六宛芭蕉書簡に「朶雲拝見(中略)明日其角桃隣可参由幸一座可有佳興候へ共(下略)」(『校本芭蕉全集』「書簡篇」)とあり、其角も句座出席の予定のことが知られる。注八〇。

○三月晦日(二十九日)より

夏○四月二・三日まで 芭蕉、許六の旅宿に逗留。其角このころすでに『句兄弟』編纂の意図あり(『俳諧問答』)。注八一。

○四月一日 其角も同席せしか(『旅館日記』)。注八一。

○四月某日 許六、故郷の彦根に木曾路經由にて帰るとて、芭蕉・其角の餞別吟あり(『韻塞』)。

木曾路とや涼しき味をしられたり 其角

○四月 桐風、其角の点を乞う(『呉竹』)。

○五月一日 芭蕉、藤堂妥女邸を訪問、帰途其角亭に立ち寄る。この前後、許六の江戸出立のことで芭蕉・其角に行き来があった。注八三。

×元峰と夏の題十五を選び、句合あり『桃の実』

×元峰と第三迄一あり『桃の実』「うたゝねや」の巻。

○五月刊記 元峰編『桃の実』発句二一・第三迄二・歌仙一入集。元峰の文中に、其角の句に触れる箇所一。資料篇九〇。

×東潮、万句興行。勝手方とりもつ『松かさ』。注八四。

△六月二十八日

牛島三邊の神前にて

雨乞するものにかはりて

夕立や田を見めぐりの神ならば

(『五元集』他)。注八五。

注六四 既出の元禄四年秋の頃に「△大津の尚白、撰集の志を伝え来る。これを祝って句を送る」とし、注(六二)に芭蕉の序文代作の件とは別に、其角が尚白の撰集のことを知って句を送ったことは事実と考えてよい、とした。『忘梅』の編集は元禄四年には成り、五年には発刊予定であったとされる(荻野著『芭蕉論考』他)。従って一応ここにおく。しかし、上述の元禄四年秋の項の件は事実と考えてよいが、『忘梅』の中に載る其角の句は、このときより後に成った句があるのではないかと思われる。集中の句のうち「ふく洗ふ」の句は『有機海・となみ山』(元禄八年三月上旬刊記)に載る。また「年たつや」の句は『元禄七甲戌歳旦帳』に載り、しかもこれを発句に表八句が載り、これに芭蕉の付句がはいっている。『忘梅』が出版延期あるいは中止になったため、「年たつや」の句を元禄七年の歳旦吟に流用したとも考えられぬでもないが、「ふく洗ふ」の句など、元禄七年の其角上京時の作品と考えた方が自然でもある。後考を要する。

注六五 其角の三物がどのような作品であったかは不明だが、元禄五年の歳旦吟と思われる句に「あくる夜も仄に嬉しよめか君」(『七瀬川』)がある。これを立句にしたものか。

注六六 芭蕉・其角が饒別の句を贈ったことは『葛の松原』で明らか、また『削かけの返事』に「其二月十日には……祖翁は五器の発



句あり其角は紙鳶の発句有杉風枳風など十一人の連衆也」とあり、これを反駁した書の『猪の早太』の文もこの事実を否定した書き方ではない。

注六七 この書簡『校本芭蕉全集』による(1)の中で「此地点取俳諧、家々町々に満々／＼点者どもいそがしがしがる体(14)に聞え候。…其中に独まざれぬ物は其角斗二而候」とある。

注六八 龜山鈔校注は『稿本其角連句集』による。

注六九 芭蕉の句は元禄五年説が有力であるが、元禄六年の可能性もある。其角の句は、許六の『旅館日記』(俳書叢刊による)に風雪の句とともに元禄六年春と思われるところに載り、場合によつては芭蕉の句とは別のところで成つたとも考えられる。なおこの芭蕉の句を発句とした其角・嵐雪と三吟歌仙が『俳諧未来記』(明和二年序、酒竹文庫による)に載る。ただ、この歌仙は、其角の付句「高田の喧嘩はやむかしなり」「栄よと未来を植し花の陰」など、前者は後考を要するが、巷間に知られる中山安兵衛の事件などが想起され、後者は、本書の題名「未来記」とともに、後述のようなことから作為が感じられ、偽作ではないかと思われるものである。「未来記」の語は、其角の『花摘』の六月十日の項に出、また本稿元禄四年五月、「猿蓑」序文を認む」の注(五九)に記したように其角がこの語を題名にした俳文もあつたらしく、其角を多少とも知るものにとつては、一応はいかにも其角が使いそうな語ではある。一方、「花の陰」の語は、これも『雑談集』で、其角が「花の陰うたひに似たる旅寝哉」の芭蕉の句を挙げて未来の語は用いていないが、未来の作風を先取りした句と言つた意にもとれる称賛の文がある。しかし其角のいう「未来」の意はややこの句「未来を植し花の陰」の意と異なる。其角のいう意は自分自身の体験で芭蕉の句が未来を先取りしていたことがわかつたの意だけでの未来で、未来を先取りしようとの意図の下に芭蕉が作句したの意ではない。従つて「栄よと未来を植し花の陰」と未来を先取りの意図を示した意にとれるこのような句を其角が作るとは考えられず、また以上のことが逆に其角の作らしく作つたということを感じさせるものがある。このようなことからこの三吟歌仙は後での偽作であると思われるといふことだけをここに申し添えておきたい。

注七〇 『俳諧問答』には

…八月九日深川の庵をたゞき：問テ云師ト晋子ト師弟はいつれの所を教へ習ひ得たりといはむ答テ云師か風閑寂を好てほそし晋子か風伊達を好てほそし此細き所師か流也爰に符合スといへり

とある。なお次注参照。

注七一 注六〇に記した、尾形「芭蕉と許六」(『芭蕉研究』第二輯)によれば、芭蕉と許六との交渉を詳細に考証、「滞府中の二人の

交渉を簡単に一瞥しておきたい。但し叙述を簡潔にする為に年次を追うて大項のみを掲げることとする」として、両者の交渉を

年次順に掲げてある。その中の其角にも触れてる部分だけを以下に列記する。

元禄五年

八月十五日 許六、其角・嵐雪・桃隣と会遊す。(前引「旅館日記」)

九月十三日 許六、この夜其角に会せるか。「旅館日記」

年末 其角に会せるか。(旅館日記)

元禄六年

歳旦 「旅館日記」に芭蕉・其角連三ツ物(以下略)

三月三日 許六、其角・嵐雪・桃隣と会す。「旅館日記」

四月一日 其角も同座せしか。「旅館日記」。

五月六日 許六出府、帰郷の途に就く(略)。其角・杉風・桃隣・百里・陳曲・奚魚亦餞別吟あり。(菊本氏藏「癸酉紀行」真蹟)

注七二 『けし合』については『けし合』試論(網島三千代稿『連歌俳諧研究』第六十六号所収)、「統『けし合』試論」(同、『俳文

藝』第二十三号所収)に詳しい考証がある。其角の句は『けし合』の跋句として入集したものである。

注七三 書簡中の其角の発句から見ての元禄五年との推定である。書簡の宛先の詞山は其角の撰集では『雑談集』に発句一、入集。伝

不明であるが、宛先名に詞山公とある。書簡中に出てくる機は、『句兄弟』に発句一、『未若葉』に発句一、『焦尾琴』に発句一、歌仙一卷(付句九)入集。これも伝不明であるが、詞山と何か関係のある俳人と想像される。

注七四 意専宛芭蕉書簡

(上略)

声かれて猿の歯白し峰の月 キ角

(中略)

塩鯛の歯くきも寒し魚の棚 愚句

取紛候間早筆

(下略)

〔校本芭蕉全集〕「書翰篇」

注七五 酒堂江戸下り。元禄五年九月十六日芭蕉庵到着。元禄六年一月末、芭蕉庵を去って帰国の途につく。〔近世文芸資料と考証〕

I、大内編「酒堂年譜」。

注七六 この表八句に関しては、大磯義雄著『笈の小文（異本）の成立の研究』に、同氏所蔵の写本『笈の小文』にこの表八句が付載されてあり、これについての考証が載る。それには以下のようにある（同書三十七ページ）。

従来存疑の部に入れられているものである。この顔触が同座したという点に疑問を持たれ、あるいは五句目の盤子以下は同席してのものではなく、後日継ぎ足したものととも言われている。この連句の初出は富鈴篇『小春笠』（元文五年刊）で「年頃道に遊ぶの縁にや、新古の集彼是の中に、古人落柿舎除元の一枚刷を見出しぬ。六十年來芭蕉翁・晋子、人々の面八句也」の識語がある。そして発句には「壬申歳暮之隘」、それに並んで「世中をいとふまてこそかたからめ」の前書があり、八句の終りに「下略」と記してある。

壬申は元禄五年であるが、この発句は『雑談集』の上巻の「世中を、云々」の前書付で出ており、次に「元禄辛未歳内立春日筆納狂而堂燈下」と其角の識語があるので、元禄四年歳暮の吟であることは明白である。又「面八句也」としながら「下略」とした点にも疑問を持たれている。これについては架蔵本では表六句のみ抄出した歌仙四巻には「跡畧之」とあるが、この八句にはそれがなくて八句のみであることをはっきりと示している。

さて他の疑問をいかに考えるか。元禄四年帰東の芭蕉に盤子は随伴して江戸に出、そのまま江戸で春を迎えているのでこの連句は五句目までこの年の暮に右五人同座して興行したものと見たい。その表五句を其角あたりが京の去來の許に送ったのであるうか。それに去來ら三人がおそらくは同座して継ぎ、これを一枚摺としたものではあるまいか。その時期は「除元」の「元」の方、即ち元禄五年正月であろう。そしてその壬申が間違つて冒頭に付けられたのではあるまいか。

『小春笠』の編者富鈴は言うまでもなく後の宋屋で、誠実な人柄のように思えるので、この識語の信頼度は高く、しかも今回架蔵本の中に見られることによつて、この表八句は確実なものか、あるいは確実度の高いものと見てよいかと思う。

注七七 『時代不同発句合』（綿屋文庫）には、

四十三番

(略)

第十一

左 定盛

瓢箪も実を捨てこそ鉢たゞき

右 其角

其ふるひ瓢箪みせよ鉢扣

とあるが、これは「そのふるき」の形で『いつを昔』に去來の句として載り、其角の句ではない。

注七八 「此の頃の稿か」とあるのは、石川真弘編『蕉門俳人年譜集』『宝井其角年譜』、元禄五年の項による。

注七九 『校本芭蕉全集』『連句篇(丙)』によれば、

年代未詳であるが、『一葉集』は「梅が香や」の付合の前におき、「春風や」の付合のあとに記してあるので、仮にここに出した。と頭注して、元禄六年の項に

春嬉し野は蝶鳥になつかしく 其角

水きはもゆるかけろふの石

出代の荷物去年よりかさ高に はせを

(金蘭集)

と載る。なお、「なつかしく」に頭注して「懐しき」(『一葉集』)とある。

注八〇 許六から手紙の返事の書簡で、許六の手紙に「明日其角・桃隣」が許六の旅館へ、「可参由」書かれてあったもののようであるが、芭蕉の手紙の文面は、桃隣も多分、そして自分(芭蕉)は出席できぬ旨を記したものととれる。従って実際には其角のみ出席した結果になったものととれるが、事實は不明。なお、「三月二十日ころ」としたのは『校本芭蕉全集』『書簡篇』の考証に従った。

注八一 『俳諧問答』『古典俳文学大系』に

其後(元禄六年)三月尽より卯月の三、四日まで、予が宅に入て逗留し給ふ。(略)于時<sup>とき</sup>

人先に医者<sup>いしや</sup>の袷や衣がへ

といふ句、即時にいひ出す。師掌を打て云く、「奇なる哉く是也(略)」と、感じられたり。(略)其角に語れば、晋子もよ  
くきつつけて、(略)則、『句兄弟』に可入と書付たり  
とある。

注八二 注七一参照。なお、前注の許六の「人先に」の句は、『俳諧問答』の語り口では、其角同席のときのことではなかった、と思  
われる。

注八三 元禄六年五月四日付、許六宛芭蕉書簡(『校本芭蕉全集』『書簡篇』)に、

朔日御入來不得御意御殘多兼而相待候處晦日に采女殿やしきへ参候而ことのほか気色あしく帰庵少遅候の間も心にかゝり候故

もとりに其角前へ出候而もしあのあたりにいまた御寄候半かと音つれ申候へ共しかく様子も知れ不申候昨日立なからに御いとまこひ可申と朝から心かけ申候へ共天氣不定故見合申内段々客来(略)

一 絵色紙素堂へいまた今に得遣し不申候間明日一所に可進之候はさみ箱へ御入可被成候桃隣方へ被遣候は拙者先日参其角方へ人やらせ吟味させ申候へ其其角留守にてしれ不申候明日参候様に可申遣候(略)

一 其角餞別第三是も御ゆるさるへく候可然句も無御座候余り拙者過たるも不興之事に候間発句脇計に御捨可被成候(略)とある。許六の江戸出立は五月六日『韻塞』、これを前に芭蕉の諸家の餞別吟の世話、また暇を求めてのいとまごいの面談の機を得んとしたてたさまが知られる。其角方への連絡はたまたま其角不在、翌日其角の芭蕉庵訪問の事実があつたかどうかは不明だが、とにかくこの前後、芭蕉・其角との間に行き来があつたことが想像される。

注八四 東潮の万句興行を記念しての俳諧集『松かさ』(元禄七年正月元旦刊記)の序は風雪の書簡体の一文が載せられてあり、これに「今宵九月十三夜足らずして満ル悦」とあるので、万句興行はこのころ成つたかと思われるが、其角の句は夏なので、いまこにおく。因みに其角の句は

東潮の家にて万句興行の時

勝手とりもつへきよし頼まれて

手に移ス蓼すりこ木の零哉

とあるもので、蓼の季語は当時の俳諧書では四月・五月に配される『近世前期歳時記十三種並びに本文集成総合索引』による。

注八五 『元禄宝永珍話』(国書刊行会本に拠る)に

一 元禄六年六月廿八日、其角十三南茅場町回船問屋某、俳名を白雲其角門人紀伊国や文左衛門といふ人にいざなはれ〔原本とあり、また『近世奇跡考』(卷之三)に脱字〕

② 其角雨乞句考

其角牛島にて。雨乞する者にかはりて『五元集』ハ夕立や田をみめくりの神ならはとせしは。いづれの日にや。詳ならざるによりて。予三冊の社主につきて。たづねしに。元禄六年六月廿八日の事とぞ。然則其角三十三歳の時也。一説に南茅場町。回船問屋。某。俳名を白雲門人といふ人にいざなはれ。船あそびに出て。此事ありしとぞ。(下略)とある。後者に「一説に」とあるのが、前者に書かれてある説と思われる。当時かなり流布していたであろうこの説に従つてこの日に成つたものとしておく。

資料篇

六四 『河内羽二重』

槿あはひに猫よく寝たり下涼 其角  
(綿屋文庫)

六五 『わたまし抄』

鶴なくや此暁をほとゝきす 江戸其角  
(酒竹文庫)

六六 『春の物』

妖なから狐貧しき師走かな 江戸其角  
(早稲田大学蔵、資料影印叢書、国書篇第十卷、『元禄俳諧集』)

六七

『忘梅』  
(序文)

(略) 今年集を撰ひ根を辛崎の一松に託して忘梅といふ (略) 今潮南の汀に梅を挙て武蔵野の遠きさかひまてはの匂はせけるに  
わすれ梅忘れぬ人の便り哉  
と其角何か許より云をこせたり (略)

なつかしき枝のさけめや梅の花 其角

菊か香や瓶より余る水にまて

ふく洗ふ水の濁りや下川原

年たつや家中の礼は星月夜  
(酒竹文庫・俳書文庫)

六八 『すかた哉』

この人数舟なれば社涼み哉 江戸其角  
(柿衛文庫)

六九 『きくらぎ』

花に 来て 僧とも 佐ん 塩着 江戸 其角  
曙や ことに 桃花の 鳥の 声

片手うち落されたる  
煎鳥鍋を幸の物と

忠度と 灰にかゝれし 火鉢 哉  
目は かりは 気まゝ 頭巾の 浮世 哉

(綿屋文庫写本)

七〇

『豊西俳諧古哲伝草稿』

元禄五二月十九日

又下野侯へ召れて御会

我歳や けふも 無事にて 春の 雨 大津尼 知月

不断 目ゆかし 花園の 湖 露沾公

卷せぬる 亭の 蔭の 戸霞 西国 桃隣

初に 燕の 巢を かけに けり 尺草

飯時は 子を 呼に やる 朝の ほと 未陌

湯船を つなく 川岸の 雨 沾荷

名月に 下駄は く音の 気疎 さよ 乙州

うそ 肌寒く 髪の 落ちる 其角

朝顔の 今朝 姿見に 遣いと 沾蓬

三絃 かりに 遣るも かねこと 沾徳

呑中の 味くら からぬ 夜の 水 沾徳

爰に 手を うつつ 国のお たやか 沾国

大釜の 御湯に 威を 添ふ 神の 庭 沾国

馬蹴て 行 屋根の 鶏 草

西行の目にかゝりたる軒の松  
 今も遊女の名のみ古市角蓬  
 おなしさま筆帖か書も恋の文  
 蠅追ふ隙にさむる夕飯隣  
 牛の子の荷を負て行乳にすかり  
 自然と代々の富をいふ顔  
 人の欲忘るゝため秋の月  
 十日まで嗅く酒瓶の菊  
 州徳陌沾

下略

龜山鈔校註(文政十三刊)

\*戸霞三河 \*桃隣三河 \*川三河 \*下踏大津 \*うす大津 \*乙州大津 \*這大津 \*ひか大津 \*り大津 \*三弦

\*「以下略其角も満巻まで有知月母子桃隣は蕉翁門人也」

(大内「豊西俳諧古哲伝草稿(一)」『鹿児島大学文科報告第二号』龜山鈔校註『稿本其角連句集』)

七一 『北の山』

閨怨

嫪せし時の枕か土用ほし 江戸其角

名月や畳のうへに松のかげ

名月や竹をさたむる村雀

片手打落したるいり鳥鍋を

幸のものかなとて

忠度と灰さかされし火桶かな

炭焼のひとりそあらん釜の際

(綿屋文庫)

七二 去来宛芭蕉書簡(拔萃)

去日芳翰両度此之内ないきとの御下其角迄御届未得御意御宿も不存候(略)



一 此方俳諧之体屋敷町裏屋背戸屋辻番寺かたまで点取はやり候尤点者共之為には悦にて可有御座候へ共さてく浅ましく成下り候中く新しみなとかるみの詮議おもひもよらず随分耳に立事むつかしき手帳をこしらへ礫獄門巻くに云散らしあるは古き姿に手おもく句作一円きかれぬ事にて御座候(略) 其中にも其角は不紛居申候これも世上を悪み候而当年はしるて俳諧発句不致候愚老へ深切に相勤候前々よりは年も重り候故か万おとなしく大悦に存候(略)

一 愚老住所内々申進し候通り橋町と申て(略) 江戸はつれなから江戸中遠くもあらず候(略) 卯月初より深川に草庵とりかり頃日既(に)就成候九日十日之内に移申候跡の店には桃隣を残し候是非もなき於泥の中に落入て名利の点者となり果候半も不便なから先我等召つれ候ものとして其角など連衆不残取持目をかけ候而跡に残し候ほとには仕よせ候へは愚眼よりは不便に存候へ共ぬしは本懐の体に悦ぶ氣しきにて御座候(略) 盤子は二月初に奥州へ下候いまた帰不申候こいつは役(役)に立やつに而無御座候其角を初連衆皆く悪立候へは無是非候(略) 『校本芭蕉全集』第十卷)

七三 『葛の松原』

○ 芭蕉庵の叟(略) 弥生も名残おしき比にやありけむ蛙の水に落る音しはくならねは言外の風情この筋にうかひて蛙飛こむ水の音といへる七五は得給へりける晋子か傍に待りて山吹といふ五文字をかふむらしめむかとをよづけ侍るに唯古池とはさたまりぬ

○ 晋子も鉄炮といふ名のいひ難しとて千々にころはくたきける也おなし集に品かはるといふ恋の論は微細のところかくそ心をとくめけむ殊勝の心さしいとらやまし晋子か語路おほむね酒盃に渡れりといふ人あるに宋ノ泊宅編には白氏か二千八百言飲一酒の詩九百首なりと答へ待るといへど晋子か性人にまきれねは楽天か飲酒はなをかきり有けりとして用の事かたつけ侍りぬ

○ (略)

梅若菜鞠子の宿のとり汁

(略)

むかしより文章には結前生後の詞といへる事は今の若菜のはたらける物ならむか(略)

角文字やいせの野かひの花薄 其角

阿叟ははしめて結前生後の詞を用ひ晋子ははしめていの字の風流を尽す古今俳諧のまくらならむとよき人も申され侍しよし

蚊柱に夢の浮はしかゝる也 同

定家の卿の夢のうき橋はとたへてひさしくなりぬれはと晋子も白讀申つるかかゝる事人のいふへき口質にもあらず天縦の風骨念相の外に志を得たりしかるを左右の趣をとらへ世人の口意にさきたる事は芭蕉庵の叟なるへしとよき人も仰せられしかつねのころ誠にかたし

秬きの葉や櫛かにかけるふ玉祭、珍碩  
降雪に淡路は夢の心地也 支考

夢ともなくうつともなき無心所着の観相かはしらのことき物あらは千載の莊子をまつといへるならむ

○晋子が宿札になつけたるとはれ良といへるは下の五文字にてしつめたと阿叟もつねに申され侍しか

○一句の姿たしかならぬは趣向のなき事を口先にてまきらかしたる故なりと晋子が導き侍る大切の事なり(略)

○(略)

柴船にこかれてとまる螢かな キ角

蟬啼や木のほりしたる団壳 同

(略)

東行、餞別

此こゝろ推せよ花に五器一具 芭蕉

(略)

白河の関に見かへれいかのほり 其角

(略)

(竹冷文庫)

七四

『己か光』  
京への文にきこえ侍る

それよりして夜明の馬や蜀魂 其角

人が人を恋るこゝろや花に鳥

うつくしき顔かく雉子のけつめ哉

花さそふ桃や歌舞妓のワキ躍

散花や沓を隔に足の裏

卯の花や蛭蝸から山の道の隅

蚊柱に夢の浮橋かゝるなり

取日よりかけて詠るたはこ哉  
名月や暈の上に松の影  
我雪とおもへはかるし笠の上  
炭焼の独そあらん竈の際

翁つゝかなく霜月初の日  
むさしのゝ旧草にかへり  
申さるめつらしくうれ

しく朝暮敲戸の  
面く対して

都出て神も旅寝の日数哉 翁  
住捨し幻住庵には

いかなる句をかのこされ  
けんそれはそれさて世の  
中をうけたまはるに

妖まなから狐貧しき師走哉 其角  
かくれけり師走の海のカイツリ鴉ツリ翁

七五

『富士詣』

弥陀のりさう蒙らすはとこそ

祈りしに是か結縁は

夏の中に杓子をかふる鼠かな

さ月十日の夜東潮の食次  
に杓子のうせけるを

とふらひける也

(酒竹文庫)

七六 『柞原集』

散花や杏を隔つる足のうら 江戸其角  
目はかりはきまゝ頭巾のうき世哉

(綿屋文庫写本)

七七 『けし合』

跋 其角

罌粟 畠花 散ル跡ノ須弥幾ッ

(酒竹文庫)

七八 『誹林一字幽蘭集』

ゆく水や何にとゝまる海苔の味 其角

長野豊受野をわたりて

角文字やいせの野飼の花すゝき  
いさくまん年の酒屋のうはだまり  
蚊柱に夢の浮橋かゝるなり

歌舞妓子の死せるをいたむ

折釘のかづらや残る秋の蟬  
顔ぬくふ田子のもすそや五月雨

伊勢大輔

いかばかり田子のもすそやそほつらむ晴間もみえぬ比の五月雨

此句は歌をとれるゆへ歌しるすにをよはねと

一五文字歌を力とせざるゆへ歌一首不略しるす

菊の香や瓶にもあまる水に迄  
仏骨表をよむ

しはらくは蠅をうちけり韓退之

授記品

無有魔事

稻妻や足どりおなし舟のへり 岩翁

又

くもりしかふらで彼岸の夕日影 其角

神力品

現大神力

法の花ちるや高座をたゝく音

(綿屋文庫)

七九 『鶴来酒』

爰かしこ蛙なく江の星の数 江戸其角

(綿屋文庫写本)

八〇 詞山宛其角書簡

たへす御出会申候て御うはさのみ申候御勇太目出度奉存候機一にも御無事と相見え候て珍重奉存候みちの記御調近比く御奇特に奉存候是はそこくに引直し申候半は無本意被存候まゝ此方に留申候而集などの時引貫可申候仍之つれくの御句斗を可非書付進申候弥不絶御工案つものり候へかし頓而歳且時節に成申候まゝ被仰合候て御発句奉待候午御次手庄右衛門様へ可然御心得被仰入可被下候心緒重而委可申解候

己上

十一月八日

此比野径の水辺を申候  
あしろ守大根ぬすひととかめけり 其角

詞山公

(校)「たへす」以下「申候」まで行間に細書。

(飯田編『蕉門俳人書簡集』)

八一 『継尾集』

支考遠遊の志ありこれにをくるに

白河の関にみかへれいかのほり

其角

心の奥は猶かきりなくや有けん秋風ならてこゝはみな月のなかはにのほられしそ本意なしなとも語あへるに酒田の不玉おとゝし  
思ひ立ちける集ありこれを都のつとに頼まれ待るとて頭陀ひらき取出けるけにも故人の愛をとらす今人の眼をよろこはしむ萩も  
薄も穂に出し秋こそあれといひてその末につく

其角

飯鮮の鱧なつかしき都哉

物書付て團わすれす

細曳の小袖もたるむ奥深に

かた口あつる樽の呑口

月の夜の庭に西瓜を並へ置

すまふを崩す村煎

所々の秋通り切ッ手をたのむ也

本名しらぬ誹諧の友

葬礼も人の上なるもとり足

三更沈る江戸橋の塵

つやくと雨の光の石瓦

サヤ一はいにほらむ夏豆

蒜にたえて疝気のなかりけり

女客には内寝ぬ盆

照月に禰宜か化粧のかゝはゆき

新羅の使舟路露けし

貊嶋のくもるに花のたな引て

夜明の雉子は山か麓か

五む十し何ならはしの春の風

支考

桃隣

角

隣考

角

隣考

角

隣考

角

隣考

角

隣考

角

隣考

角

隣考

角

隣考

産飯<sup>ハ</sup>とるうちを待合せけり  
 考隣角  
 髪一板をはらひ捨たる  
 考隣角  
 洗濯のなる紙子とき分ケ  
 考隣角  
 傾城を娘く<sup>く</sup>とたはむれて  
 考隣角  
 なみたにはつむ歌の立<sup>チ</sup>声  
 考隣角  
 ぬすみにも得入<sup>ヲ</sup>てそはむ雨の月  
 考隣角  
 空也の鹿の遠く遊ばぬ  
 考隣角  
 蓮の実は仏のわけし糧ならん  
 考隣角  
 形よき腹にしるし福一相  
 考隣角  
 いせ参り蚊屋一はりに取込て  
 考隣角  
 とほり口さへ魚灯いやしき  
 考隣角  
 戸柵<sup>ウ</sup>やさして異なる鯛の尾  
 考隣角  
 けふも帰らぬ佐渡の掛取  
 考隣角  
 撰集抄行脚の程をなくさみて  
 考隣角  
 内のしまるを女儀の一得<sup>ト</sup>て  
 考隣角  
 花贈る詞の品のうつくしさ  
 考隣角  
 幾世をちきる象潟の春  
 考隣角

(酒竹文庫)

八二 『七瀬川』

あくる夜も仄に嬉しよめか君 其角

(綿屋文庫影写本)

八三 『新始』

両国橋の舟に遊びて

身にしむや宵暁の舟じめり

(国会図書館本)

八四 『くやみ草』

炭斗くやみは鏡のぬけし手樽哉 其角

(綿屋文庫影写本)

八五 『反古さらへ』

わか子なら供にはつれじ夜の雪 其角

(酒竹文庫)

八六 『この花』

蟬をきけ一日啼て夜の露 其角

(竹冷文庫)

八七 『浪花置火燵』

目計は気まゝ頭巾の浮世哉 江戸其角

(竹冷文庫)

八八 『彼古礼集』

けさやかによるく夏をわすれけり 其角

葬にしはしこてふの光り哉

祓句

陣に食焼篁のかかけ

山風笈をならべてふせく覽 其角

酒買に行草庵のはる 其角

水ゆる橋のうへより網うちて 其角

旅衣集におくる歌よみて 其角

泣て遊はん我恋のとも (綿屋文庫)

八九 『猿丸宮集』

心空に身をひかへてやいかのほり 其角



九〇 『桃の実』

(京大題原文庫写本)

(巻頭)

富花月

草庵に桃桜あり

門人にキ角嵐雪有

芭蕉翁

両の手に桃とさくらや草の餅

菓子盆に芥子人形や桃花 其角

桃の日や蟹は美人に笑るゝ 嵐雪

かゝる翁の句にあへるは人くのほまれならずやおもふに素人の句は青からんものをと人やいふらんおもふらん  
しろしとも青しともいへひしの餅 元峰

夏題十五

判者

句合

都鄙万人

卯花

うのはなや蠣から山の道の隈 其角

(略)

若竹

(略)

わか竹や鞭にわかぬる箱根山 其角

鯉

人のもとにて

人の誠先あたらしき鏗哉 同

(略)

蟬

(略)

せみ啼や木のほりしたる団売  
其角

夏頭巾

昼よりいねて

うたふねやかふりつめたる麻頭巾  
同

(略)

幟

(略)

幟網 沖には幾つ帆かけ船  
其角

五月雨

顔拭ふ田子のもすそや五月雨  
同

(略)

夏草

河辺

夏草や橋台見えて川通  
其角

(略)

蚊

(略)

蚊遣火に蚊屋つる方そ老独  
其角

水鶏

水鶏啼夜半に遊行の勤哉  
同

瓜

ならはしの塩茶のみけり瓜の後  
其角

(略)

夏川

夏川に蔵より仕出す簀子哉  
同

(略) 麦

秋しらぬ茂りも憎しからす麦 キ角

夏

傾城の夏書やさしや飯の宿 同

(略)

心太

順礼のよる木のもとや心太 キ角

句合終

世の花や五年以前の女とは キ角

此句をおもふに王ふちの笠きたるは今の世に乞食女ならてはなし然は小町か世にふる様もさこそかはりておもふらんと晋子かおもひ付たるなるへし五もしに世の花とをきたるは花実そなはりたるにや

馬士起て馬を尋ぬる麦野哉 其角

川筋のせき屋はいくつけふの月

鷺鳥片日かはりや夕時雨 キ角

網代守大根盗をとかめけり

第三迄

(略)

同

梅か枝やより添ふ君が髪の毛 兀峰

東風吹下す樓の薫 其角

祀<sup>ヤマシ</sup>春のひかりのやはらきて

同錢別

(略)

同

うたゝねやかふりつめたる麻頭巾 キ角  
 何を缺るそ窓の若竹 元峰  
 夕月に筆の命毛謙見てて 同

……キ角かやりくれて又やさむしる年の暮とせしはとゝめす惜ますをのか気像のまゝなる骨肉の上に頭れたるなるへし……

水鳥よ汝は誰を恐るゝそ 元峰  
 白頭更に芦静也 翁  
 中汲の酔も仄に棒提て 酒堂  
 月の径に沓拾ふらし 元峰  
 鳩吹は覆の実こほるゝさらくと 翁  
 板の埃に円座かさぬる 酒堂  
 簾戸に袖口赤き日の移り 里東  
 君はみなく撫子の時 翁  
 泣出して土器ふるふ身のよはり 元峰  
 御念比にて鎌倉をたつ 里東  
 門くに明日の飾りをくはりをき 酒堂  
 蕙踏なとうつす塩縮 元峰  
 山陰をまれに出たる牛の尿 翁  
 梨地露けき児のさけ靴 酒堂  
 名月に雲井の橋の一またけ 里東  
 今年の米を背負ふ嬉しき 翁  
 花に来て我名は仏徳右衛門 酒堂

